



Title	『山月記』を救済潭として読み解く単元学習の創造 - 李徴の執着心と認識の変容、そこに関わる袁愔の存在に着目して -
Author(s)	山本, 悟史
Citation	国語論集, 15: 106-115
Issue Date	2018-03
URL	http://s-ir.sap.hokkyodai.ac.jp/dspace/handle/123456789/9746
Rights	

『山月記』を救済譚として読み解く単元学習の創造

—李徴の執着心と認識の変容、そこに関わる哀慘の存在に着目して—

山本 悟史

一、はじめに

『山月記』は一九五一年(昭和二六年)に初めて教科書に採録され、六十七年もの間、定番教材として読み継がれている。その間、膨大な先行研究と授業実践が提示されてきた。その中でも、『山月記』の主題をどのように捉えるかという問題は、古くも新しい問いである。

従来、『山月記』の読みは、近代人の自意識に焦点が当てられ、驚(一九六七)の述べているように「おのれの尊大な自我故に虎と化し、理不尽な生を生きねばならぬ男の悲劇を通して芸術に執する者の苦悩を描いたもの」という「悲劇の物語」とするのが一般的であった。山本(一九九八)は「李徴は語ることによる癒しを経験しておらず、救済もない」と述べている。しかし『山月記』は単なる悲劇ではなく、そこには「苦しみのカタルシス(浄化)」があるという指摘や、虎に憑依した李徴の亡霊への「鎮魂」ではないかという指摘もある。そして稿者もまた、『山月記』にはある種の救済があると考えている。稿者が本稿で提示したいのは、李徴の救済とは何か、そしてなぜ救済と言えるのか、ということである。

稿者はかねてより心理学や社会福祉学に興味があり、ロジャース(一九五二)の来談者中心療法の基礎となる自己理論や、嗜癖(ディクシオン)を抱えた者たちが組織する自助グループ(セルフヘルプ・

グループ)で見られるナラティブ・アプローチを、文学や教育に援用できないかと考えてきた。本稿では、こうした知見から『山月記』の読みを捉え直してみたい。また、その過程で見えてきた李徴の執着心とその呪縛からの解放、そこに関与する重要な他者の存在としての哀慘に着目した単元学習を紹介したい。小山(二〇一〇)や川嶋(二〇一一)の報告によれば、学習者は「教師の読み」を超えて李徴の自己認識の深まりに着目し、そこに哀慘という重要な他者がいたことを発見している。断絶と孤独の中で必死に誰かとつながりたいという思いを抱えている現代の子どもたちだからこそ、李徴の話に一心に耳を傾け、批判することなく存在を受容し、共感の涙をこぼす哀慘という人物の存在の大きさに気づくことができたのではないか。こうした読みの中にこそ、「いま、ここにおける『山月記』の読み」があると考える。

二、哀慘という重要な他者の存在

まず、稿者がどのように『山月記』を読み解いたかを確認しておく。稿者が最も注目したのが哀慘の役割である。哀慘はまさに傾聴の心をもって李徴と向き合うカウンセラー的存在である。カウンセラーは、決して相手を批判したりはしない。なぜならカウンセリングとは、話すという行為によつてクライアント自身が自己の内面におきている現象が自己の認識と一致しないことに気付き、自己一致を目

指して自己概念を变容して「こうとする行為であり、そのために」この人(カウンセラー)は自分の味方である、自分の世界をそっくりそのまま受け入れてくれる人である、自分をとがめない人である、と
思うような人間関係(リレーション)(國分一九八〇)を構築することが何よりも重要であるからだ。

『人虎伝』では発話回数が多い袁慄であるが、『山月記』では聞き役に徹している。その袁慄の数少ない発話の中で「その声は、我が友李徴子ではないか？」という部分は重要である。相手の名前を呼ぶということは、とりもなおさず相手の存在をこの世にあらしめるということでもある。柏木博はフランク・シユタインを例にとり、「名前も与えられずに捨てられた存在が不幸なのは、わたしが『わたし』であることを感じとりそれとなく受け入れることがきわめて困難だからだ」と指摘している。虎となった李徴は、名前を剥奪された存在に等しい。そうした「何者でもない存在」から「李徴という存在」に引き戻す大きな力となるのが、この名前を呼ぶという行為である。また「我が友」と相手との関係性を明示することは、他者との関係に不信感を抱いている李徴にとつて安心感につながるものである。さらに袁慄が「李徴子」と相手への敬称である「子」という言葉を用いている点も見逃せない。以上のことから、二人の関係は、「李徴と同年に進士の第に登り、友人の少なかつた李徴にとつては、最も親しい友であつた」と語り手の説明以上のものがあつたことがわかる。

本文には二箇所、李徴に対する袁慄の評価が、語り手によつて説明されている。李徴の詩に対して「どいかに(非常に)微妙な点において欠けるところがあつたのではないか」という部分と、「(袁慄は昔の青年李徴の自嘲癖を思い出しながら、哀しく聞いていた。)という部分である。しかし、これらの評価は袁慄が心の中で感じたことであり、李徴には伝えられてはいない。こゝでも、相手を批評したりせず、受容と共感の心をもつて接する」という、ロジャースの来談者中心療法

との一致が見られる。

三、李徴の自己変容と執着心

ではなぜこの袁慄の心の声が読者にだけ提示されるのだろうか。それはモノログとしての李徴の発言が、至んだ認識をもつた自嘲癖のある者から語られていることを読者に提示し、李徴の発言を相対化するためである。至んだ認識をもつた李徴から語られる発話は、そのまま呑みにはできない。つまり李徴は「信用されざる語り手」である。しかし、李徴の認識の変化という点に着目すれば、李徴の語る事が真実であろうとなかろうと、それは大した問題ではなくなる。大切なことは李徴がそのように認識していたということであり、またその認識が袁慄に対して物語るという行為を通じて変容していったということである。

先行研究の中には「李徴の声はしかしたちまちまた先刻の自嘲的な調子に戻つて」という本文の叙述から、「李徴の本質は変わり得なかつた」(三宅二〇〇四)とする意見もある。確かに李徴の本質的な部分は変わつてはいない。しかしそもそも性格がこのような短時間で変容するだろうか。こゝではそうではなく、「産を破り心を狂わせてまで自分が生涯それに執着したところのものを、一部なりとも後代に伝えないでは、死んでも死にきれない」という李徴の執着心が見えなくさせていた虎の変貌の理由を、李徴自身がはつきりと自己認識と喚びかけた虎の変貌の理由を、李徴自身がはつきりと自己認識できたことが、物語つたことの意味なのである。「わかたない」ではなく「わかたつた」という自覚こそ現代人にとつての救済なのであり『山月記』の時代背景は唐の時代であるが、『羅生門』と同じく、中島敦はこの小説を近代人の問題として捉え直していると考えられる。また妻子や袁慄の気持ちに思いを馳せることができるようになったことが李徴の変容なのである。李徴の自嘲癖が治ることが救済なの

ではない。

四、月の解釈と執着心

さて、次に題名にも関係してくる月について考えてみたい。李徴は「おれはたまらなくなる。そういう時、おれは、向こうの山の頂の巖に登り、空谷に向かつてほえる。この胸を灼く悲しみを誰かに訴えたいのだ」と述懐していた。李徴は今、「死んでも死にきれない」(虎になりきれない)状態にある。それは詩を後代に残したいという執着心に苛まされているからである。李徴の心の暗部には詩への執着心が渦巻いている。李徴は「闇の中からしきりに自分を招く」声に引き寄せられ、闇の中で「何か身体中に力が充ち満ちたような」野生の本能を感じた。闇には李徴の潜在意識、つまり詩に対する執着心が潜んでおり、その負の力(心の闇)が闇夜と呼応し、李徴は虎に変身した。そして月は、闇夜において李徴の執着心をまざまざと照らし出す役割を担っている。しかし、李徴は哀憐と出会い、心の苦しみを吐露し、詩を託すことによつて執着心から解放されていく。『山月記』を李徴の救済譚として捉えるならば、最後の場面において「虎は既に白く光を失った月を仰いで、二声三声咆哮したかと思うと、また、もとの叢に躍り入つて、再びその姿を見なかつた」という部分は、先に引用した「おれは、向こうの山の頂の巖に登り、空谷に向かつてほえる」という部分と見事に呼応する。李徴の悲しみ(咆哮)は哀憐によつて受容され、李徴の執着心を照らし出していた月の光も薄らぎ、李徴の心の闇は朝日の光を浴びながら消滅し、ようやく李徴は完全な野生の虎へと生まれ変わっていくのである。

ここで中島敦の『名人伝』を思い起こしてみたい。紀昌が弓を忘れたのはけつして惚けたからではなく、執着心が完全に消失したからである。『名人伝』の舞台は中国であるが、そこに込められた寓意は極めて日本の世界観に近い。弓道や剣道などの「道」は「的」の矢が当

「たること」や「相手を倒すこと」を目的とするのではない。弓や剣を通じて人間性を高めることが目的であり、的に当てたいという執着心があるうちは名人とは言えない。ただし、それは人間にとつて不可能に近い。「執着」によつて生じる「臆病な自尊心と、尊大な羞恥心」こそが人間の中に潜む「猛獣」であり、逆説的ではあるが、執着心こそが「人間であることの証明」であり、根源的な苦しみであると言える。だからこそ『名人伝』は寓意小説として成り立つ。「白く光を失った月」は、執着心からの解放の象徴である。また同時に、人間の悲しき喪失であり、野生への目覚めの象徴でもある。月にはこうした両義性が内包されている。

五、李徴が虎になる時間帯

李徴の執着心が闇夜と呼応して虎に変身させ、その執着心を月が照らし出すと解釈した場合、李徴が虎である時間帯は夜であると考えるのが妥当である。しかし菅原(二〇一一)は「李徴が虎の心を持つのは朝、そして日中」と主張している。確かに本文には「おれの毛皮の濡れたのは、夜露のためばかりではない」という叙述や、明け方の場面で「もはや、別れを告げねばならぬ。酔わねばならぬ時が、(虎に還らねばならぬ時が)近づいたから」という叙述がある。これをどのように解釈すべであらうか。

ここで冒頭の駅吏の言葉を思い起こしてみたい。駅吏は「これから先の道に人食い虎が出るゆえ、旅人は白昼でなければ、通れない」と述べていた。「白昼でなければ」ということは、白昼は安全であるということである。動物学的に考えても、虎は夜行性の動物であるから、人食い虎の李徴は夜間にたびたび人を襲っていたものと考えられる。また、汝水のほとりて虎に変身した後、李徴は「少し明るくなつてから、谷川に臨んで姿を映し、そこで虎に変身していることに気づき、茫然としている。ここからも李徴に人間の意識が戻ってきた

のは明るくなつてからだといふことがわかる。確かにこの直後、兎を食らう場面が描かれてはいる。しかし、これは早朝という朝と夜の境界の時間帯、つまり虎と人間の境界の時間帯であると考えれば納得がいく。そもそも白昼に凶暴な虎となり、闇夜に人間に戻るといふ解釈は、光と闇という一般的な文藝的コードからかけ離れてはいまいか。

では「夜露や」(虎に還らねばならぬ時が)といふ叙述ほどのように解釈すればよいのだろうか。まず「夜露」であるが、「おれの毛皮が濡れたのは、夜露のためばかりではない」といふ表現は、「夜露によつても毛皮は濡れたが、涙によつても毛皮は濡れた」と言い換えることができる。夜露によつて毛皮が濡れるのは、虎になつた李徴が夜間に獲物を探して草むらの中を激しく動き回つていたからである。また、李徴が涙を流すのは明け方、つまり次第に人間の心が戻つてくる時間帯である。それは残酷な行為を人間の心で認識する瞬間でもある。李徴は次のように述べていた。「人間の心で、虎としての己の残酷な行いのあとを見、己の運命を振り返る時が、最も情けなく、恐ろしく、憤ろしい」と。虎と人間の意識の境界線である早朝と夕方という時間帯は、李徴にとつて辛い時間帯であつたに違いない。虎の心に支配される直前の夕方には憤りのために咆哮し、人間の心が戻つてくる早朝には罪悪感のために涙を流す。このように解釈できらう。

次に「もはや、別れを告げねばならぬ。酔わねばならぬ時が、(虎に還らねばならぬ時が)近づいたから」についてはどうであらうか。ここでは、この言葉に括弧が付けられていることに注目したい。この括弧付きの言葉は、李徴の言葉ではなく語り手の補足説明である。李徴は「おれの頭は日ごと虎に近づいていく」と述べていた。つまり、最初の頃は夜に虎になり、夜が明けると人間の意識が戻つてくるという周期であつたが、次第に虎になる時間帯が長くなり、そして今

や完全な虎に変身しようとしている。「酔ふ」といふ言葉は屈原の「漁父辞」でも用いられているように「理性を失う」といふ意味である。詩人である李徴は、完全な虎になることを「酔ふ」と表現した。そして『山月記』の語り手はその表現に対し「虎に還らねばならぬ時」と補足説明を加えたものと考えられる。今、李徴は執着心によつて虎になりきれない不完全な状態、いわば前世の記憶を残した虎であると言える。語り手はこうした状態から、「完全な野生の虎」、つまり在るべき姿に「還」つたと表現し直したのである。

六、単元の実際

以上のように稿者は『山月記』を「詩を後世に残したい」といふ執着心に囚われていた李徴が、哀慘といふ理解者との出会いを通じて執着心から解放されると共に、自己認識を変容させていく救済譚」として読み解いた。題名と関連付ければ「李徴の執着心を照らし出していた月の光は哀慘との出会いによつて薄らいでいき、ようやく李徴は朝の光と共に完全な一匹の野生の虎となつて山へと還つていった」とまとめることができる。もちろん文学は多様な解釈を許容する。しかし、教室での「学習」においては、全てをオープンエンドで終わらせる必要はないだろう。特に寓意小説においては「読み解き方」を指導する上で、解釈の軸足のある程度定めておく必要がある。だからこそ教師は、自身がどのような解釈を主軸において単元を構想したのかについて自覚的であればならない。授業において教師の読みとバイアスがかかるのであれば、それを出来る限り相対化しようとする姿勢が必要であらう。また、別の解釈を提示する生徒に対してそれが妥当な解釈の一つであるか、誤読であるか、判断できる準備をしておかなければならない。

以下、稿者の読みに基づいた授業実践(全八時間)を、各授業のめあてと共に提示する。

け続けるという臆病な自尊心と、人々が自分に言った尊大な羞恥心とのせいだと考えている（傍線は稿者による。以下同じ）という答案より、生徒が「人々はおれを倨傲だ、尊大だといった」という部分と「尊大な羞恥心」という部分を混同していることがわかる。また「李徴は故郷の村で博学で才能が抜きんでていたことに臆病な自尊心と尊大な羞恥心を持つていて（後略）」という答案より、「臆病な自尊心と、尊大な羞恥心」の意味が十分に理解されていないことがわかる。第三時では正確に読解することの重要性を確認すると共に、「臆病な自尊心と、尊大な羞恥心」という逆説的で難解な表現をどのように理解するかが重要であることを指摘し、これからの授業で考えていくことを予告した。

第四時では、『おれのなかの人間の心がすっかり消えてしまえば、おそらく、そのほうが、おれはしあわせになれるだろう』と李徴が考えたのはなぜかを学習課題とし、逆説的表現を読み解くことを学習のめあてとした。二年次では逆説を読み解くことを年間のテーマとして掲げている。第四時の学習課題は易しいが、次時の「臆病な自尊心と、尊大な羞恥心」を読み解く上でのウォーミングアップとして、ゆつくりと考えさせた。

第五時では、『臆病な自尊心』とはどういうことか、『尊大な羞恥心』とはどういうことかを学習課題とし、「表現の言い換え」や「比喩」、「因果関係」に着目しながら、逆説的表現を読み解くことを学習のめあてとした。

まず、「進んで師に就いたり、求めて詩友と交わつて切磋琢磨に努めたりすることをしなかつた」と「あえて刻苦して磨こうともしず」が言い換えであり、また「おれは俗物の間に伍することも潔ししなかつた」と「碌々として瓦に伍することもできなかった」とが言い換えであることを確認した。次に、「己の珠にあらざることを懼れる」ために「あえて刻苦して磨こうとせず」という因果関係、また「己の

珠なるべきを半ば信じる」ために「碌々として瓦に伍することもできなかった」という因果関係を確認した。さらに、「己の珠なることを懼れる」の比喩を「自分の才能に対する自信と不安」と読み解き、「瓦に伍する」の比喩を「凡庸な人物と肩を並べると読み解きながら、「臆病な自尊心」は「自尊心が傷つくのをおそれるあまり、臆病になり、他者を避ける心」であると解釈し、また「尊大な羞恥心」は「羞恥心が強すぎるために、わざと尊大な態度で他者を避ける心」であると解釈していった。そしてこれらの表現は「他者を避ける」という点で、結局のところ同じであることを理解させた。

次に、「あなたの心の中の猛獣とは何か」、「その猛獣が才能を食い尽くしてしまわないようにするために出来ることは何か」という学習課題を課し、個人で考えさせた。級友と意見を交わすことができれば面白くスリリングな授業となるが、生徒にしてみれば最も他人に見せたくない自分の弱みでもある。したがってある程度時間をとり、本人にメタ認知させるだけにとどめた。

単元後の感想では次のように書いた生徒も見られた。

きつと自分にも李徴のような部分があり、今回の授業でそれがなんとなく自分の中で整理されたというか、それが明らかになってきたような気がする。僕は不器用だから、いろいろな事を効率よくできない事が多いが、それを受け入れることができず、器用にこなすことに執着し、それがゆえに時に自分の中の猛獣がうごめきたのである。自分ではもうこの境遇は変えられないのだと確信しているが、きつと一生僕はこの猛獣と闘わなければならぬのであろう。李徴のようにこの猛獣が現れないように注意したい。

自己の中に潜む虚栄心、性情としてそこに執着してしまふ自己の存在をメタ認知できていることがわかる。李徴と自分の類似点を言

葉によつて発見し、言葉によつて自分の心情を認識し、言葉によつて自己を表出していくことは、国語科教育における重要なめあての一つであると言えよう。

第六時では、「白く光を失つた月を仰いで、二声三声咆哮した」という表現において「月は何を意味しているのか」を学習課題とし、小説における象徴的表現をどのように解釈するかを授業のめあてとした。班で考えさせたところ、「a執着心が消えてなくなっていくことの象徴」、「b人間としての李徴が消えて虎になることの象徴」という二つの意見が出てきた。そこで稿者が「aの解釈であれば安らかであるし、bの解釈であれば少しもの悲しい。月は題名にも関連しており、重要な部分であると思われるが、さまざまな解釈が可能であり、そこに作品の広がりを感じられる。いずれにしても、李徴は一人ではなく、哀憐と出会えたことは救いだつたのではないかと補足説明を行った。単元後の感想には「最後の文で、月が描かれていたところが、執着心が消えたというプラスの解釈と人間の心が無くなつたマイナスの解釈ができて面白かつた」、「色々な見方ができることが面白いと思ひました」などの記述も見られ、文学作品を多様に解釈していくことの面白さにも触れることができたものと考ええる。

第七時では、中島敦の『名人伝』の重ね読みを行い、複数のテキストを関連づけて解釈する面白さを味わうことを学習のめあてとした。本文は予習として読んでくるように指示し、授業の最初に教師があらすじを確認した。その後、「紀昌はなぜ弓を忘れてしまったのだろうか」、「この小説は何を伝えたいのだろうか」という疑問を投げかけ、班ごとに考えさせた。各班の意見を確認した後、弓道を例にとり、執着心を捨てることが真の名人ではないかと教師の読みを伝えた。その上で、『山月記』の李徴の詩に「欠けたもの」を考えさせた。『名人伝』を読んだ直後に『山月記』のこの場面を読むと、李徴の名声に対する執着心が明確に浮かび上がってくる。前時の月の

解釈も想起させながら、生徒が寓意小説を読み解くことの面白さを感じることができるよう留意した。

第二次では、『山月記』で学んだ寓意小説の読み方が、安部公房の作品でも応用できるかということを確認するために、『棒』安部公房の重ね読みを行った。まず本文を十五分間で黙読させ、その後、班別に二十分間ディスカッションを行わせた。ディスカッションの途中で『棒』と『父ちゃん』の共通点は？、「先生とその弟子って何者？」、「なぜ放置されることが罰なの？」、「この小説が書かれたのは高度経済成長期（一九五五年）だけど、何か関係があるだろうか？」などと思考を促す問いを随時投げかけていった。『山月記』を読んでいるだけに、変身譚を「あり得ない」と拒絶する生徒もなく、「なぜ変身せざるを得なかつたのか」、「父ちゃんの内面のどのような点が『棒』にさせたのか」と議論を深めていく様子が見えられた。ディスカッションの後、十分間で話し合った内容を発表させた。短時間のディスカッションであったが、父ちゃんが「平凡なサラリーマン」で「人から使われるだけの存在」であり、そうした状況が父ちゃんを棒に変身させたこと、先生やその弟子が天使と悪魔のような「あちら側の存在」であることまでは理解できていた。しかし「放置されること」が罰になることの意味「までは読み解くことはできなかった。そこで最後の五分間で「父ちゃんは主体性がなく、人間であった時も人に乱暴に使われる存在であったが、棒になってからも使われ続ける存在でしかなく、主体的存在としての尊厳が剥奪され続けることが罰だったのでないか」という教師の読みを伝えた。教室内で「あー、そういうことか」という声が聞こえ、生徒が寓意小説を読み解く面白さを感じていることが伝わってきた。

最後に、変身譚では変身後の性質と変身前の性質を比較することが重要であることを指摘した後、「李徴はなぜ『虎』に変身したのだろうか。李徴は『虎』の姿を『我が醜悪な姿』と言っているが、『虎』は

醜悪だらうか」というオープンエンドな問いをあえて提示し、授業を終了した。

七、実践の省察と今後の課題

全八時間の授業の中で、安部公房の『樺』や中島敦の『山月記』の重ね読みも試みたため、一時間一時間の授業展開が速くなり、学習課題にじっくりと取り組ませる時間を確保できなかったことは反省すべき点である。とは言うものの、寓意小説は謎が仕掛けられているだけに、ある程度展開が速い方が学習者にとつてもスリリングで面白いのではないだろうか。単元後の感想では「漢文調で内容の理解が難しかったけど、読みごたえのある話でした」、「今回の授業を通して、時間をどんどんかけて読めば読む程、多くのものを読み解けると実感した」などの記述も見られ、教材が難しかった分、読み解けた時の達成感も大きかったようである。

本実践では「詩を後世に残したい」という執着心に囚われていた李徴が、哀慘という理解者との出会いを通じて執着心から解放されると共に、自己認識を寛容させていく救済譚という「教師の読み」を主軸に置き、単元を展開していった。稿者は「哀慘の存在を重視する読みは、いま、ここにおける『山月記』の読み」、つまり学習者の「共感」を引き出す読みになるのではないかと予測し、単元を構想したわけであるが、結論から言えば、それを客観的に実証することはできなかった。

単元後の感想において、どの程度哀慘に言及しているかを確認してみた。単元後の感想で哀慘の存在について触れていた記述は担当クラスの二八・六％（七十名中二十名）にとどまった。ただし、単元後の振り返りの指示が「授業を通して、自分の『読み』が変化した点や、『はっ』とさせられた点、『なるほど！』と思わされた点などを書

きなさい」であったため、授業者の期待するような結果が出なかったとも考えられる。また、哀慘に着目しない授業との比較ができていないため、自由記述におけるこの数値を相対的に判断することはできなかった。検証方法に対する事前の検討不足が露呈した形となつた。

ちなみに、哀慘に触れていた学習者の感想には、次のような記述が見られた。

A 最初は李徴がただ自己の内省をしているだけのように考えていたが、授業を通し、そこには哀慘の存在があつてその内省であつたと「はっ」とさせられた。

B 物語の中でどれだけ哀慘の存在が大きいのかを知った。

C 黙々と李徴の話を書く哀慘については、下手に口をはさまず、ただ相手の話に耳を傾ける所が、友人という存在の模範だと思ひました。

D 親友である哀慘と話すことで、読み手と一緒に自覚していき、自分を見つめなおしていったので、時代は違つても悩むことや聞き手の存在の大きさなどは現在と共通していると思ひました。

E 最後の李徴が虎になる時が来て、哀慘に別れを告げる場面にとても心を打たれました。「哀もまた涙を浮かべ」というところから、二人ともまだ全ては受け入れられていないのかなと思ひました。この涙には二人のいろいろな思いと思ひ出が詰めこまれていると思ひます。

これらの感想を分析すると、李徴の自己変容に哀慘が大きな役割を担っていたことは「理解」できていると判断できるが、生徒AとCの記述には「共感」というものは感じられず、生徒Dも一般論にとどまつている。李徴が虎になることについて自分自身と重ねて読んだと

いう感想も十八・六%（七十名中十三名）にとどまった。本実践の学習者の感想から川嶋実践や小山実践のような熟が感じられないのは、一つひとつの学習課題にかけた授業時間が少なく、学習者自身が『山月記』を自分自身の力で読み解いたという実感がまだ不十分であったからかもしれない。また、学習者の内面に一步深く踏み込むことに発表者が躊躇したことも理由として挙げられよう。本来であれば、学習者の実生活と重ね合わせながら、学習者相互の交流を通してテーマを深めていく展開が期待されるべきところであるが、『山月記』では、李徴に焦点を当てるにせよ、哀憐に焦点を当てるにせよ、思春期のナイーブな感情を取り扱うことになるため、学習者への配慮が必要不可欠である。どのように実生活とつなげながら授業を行っていくか、稿者の単元構想と実践にはその工夫が足りなかつたと言える。本実践は「寓意小説を読み解く」という段階（学習）にとどまっておき、そこから一步進んで、学習者自身の内面に迫るもの（共感）にはならなかつた。こうした点に留意し、次に『山月記』を取り上げる際には、学習者の内面にいかに迫っていくか、また多様な解釈をいかに引き出していくかという観点から単元構成と授業の在り方を模索していきたい。

引用・参考文献

- 『山月記』本文の引用は全て『高等学校現代文B』三省堂による
- 石田実貴（二〇一五）『山月記』を題材に「生きる」の意味を「考える」『VIEW21』十月号 ベネッセ・コーポレーション
- 石田誠（二〇一四）『中島敦』山月記による表現活動―李徴について―の八つの証言と枠組み作文』中洲正堯・国語論究の会著 『高校国語実践の省察と展望』三省堂
- 石原千秋（二〇〇二）『大学受験のための小説講義』筑摩書房
- 泉田寛子（二〇一五）『山月記』東京大学大学院教育支援センター

―シーム推進機構』協調学習授業デザインハンドブック』データ編

- 板木正一（二〇一三）『山月記』『人虎伝』を読み比べ、作者の意図を考える』鹿児島県高等学校教育研究会国語部会『国語科指導方法研究会実践論文集録』第二十六次
- 井上雅彦（二〇〇八）『伝え合いを重視した高等学校国語科カリキュラムの実践的研究』溪水社
- 浮橋康彦（一九七五）『中島敦』山月記』『牛人』『高等学校国語科教育研究講座 第三巻』有精堂
- 小澤保博（二〇〇六）『中島敦』山月記』を読む』『琉球大学教育学部紀要』六十八）琉球大学
- 柏木博（二〇〇四）『しきりの文化論』講談社
- 片山一良・吉原英夫（二〇〇四）『教材』山月記』論』詩の伝録を依頼する李徴の指導を通じて』『北海道教育大学紀要（教育科学編）第五十五巻 第一号』北海道教育大学
- 香山康智（一九九〇）『山月記』の授業―課題を明示し深く読ませる授業』田近洵・浜本純逸・大槻和夫編』たのしくわかる高校国語Ⅰ・Ⅱの授業』あゆみ出版
- 川嶋一枝（二〇一三）『語り得ぬことがある』と語る―山月記』の教室から―』『日本文学』六十一巻三号 日本文学協会
- 川島幸希（二〇一三）『国語教科書の闇』新潮社
- 桐原書店編集部編（二〇〇八）『探求現代文改訂版 指導資料 第一分冊 総論／I部①』桐原書店
- 小山千登世（二〇一〇）『他者に向けて教室を開く―山月記』哀憐を可視化する志向―』『日本文学』五十九巻三号 日本文学協会
- 昆隆（一九八五）『山月記』の読解』『日本文学』三十四巻六号

日本文学協会

○國分康孝(一九八〇)『カウンスリングの理論』誠信書房

○鷺只雄(一九六七)『中島敦の『古譚』について』『言語と文芸』

一九六七年一月号

○佐野幹(二〇一三)『山月記』はなぜ国民教材となったのか』大修館書店

修館書店

○三省堂編集部編(二〇一四)『高等学校現代文B指導書』(※「山月記」の項は戸塚学が執筆)三省堂

○菅原利晃(二〇一三)『山月記』の授業―そのときの李徴の心は

人か虎か―』『国語教室』九十三号 大修館書店

○第一学習社編(発行年次不明)『高等学校現代文 指導と研究 第一分冊』(※「山月記」は海老井英次が担当) 第一学習社

○高野光男(二〇一三)『中島敦「山月記」の新しい「学習の手引き」に向けて―「読むこと」の共通理解を形成するための前提条件』田中実十須貝千里編『文学が教育にできること―「読むこと」の秘鑑―』教育出版

○高山敏幸(二〇一三)『語り方からみた「山月記」の批評的読解―授業実践と映画化の試み―』岐阜県高等学校国語教育研究会『会報』第五十号

○田口耕平(二〇一四・二〇一五)『山月記』を読み解く一つの発問』『ニエーサポート高校『国語』』vol.121 (二〇一四年春号)

vol.122 (二〇一四年秋号) vol.123 (二〇一五年秋号)

○滝本正史(二〇一五)『高校国語マル秘帳 現代文編』東書Eネット

https://ken.tokyo-shoseki.co.jp/ken_download/dl165/hkd

94351.htm

○田中実(一九九四)『自閉の咆哮―「山月記」―』『日本文学』四十三巻五号 日本文学協会

○筑摩書房編集部編(二〇一三)『名指導書で読む 筑摩書房

なつかしの高校国語』(※「山月記」の項は分銅惇作が担当)

○中川由理子(二〇一四)『文学的な文章を批評することによって

自分の考えを深める―第二学年「現代文」におけるグループでの意見交流を通して』『茨城県高等学校教育研究会紀要』第四十九号

○野口裕(二〇一三)『物語としてのケアナラティブアプローチの

世界へ』医学書院

○三宅義藏(二〇一四)『山月記』と『人虎伝』の違い―特に『自嘲癖』について』『精選現代文 改訂版 指導資料1』大修館書店

○山本欣司(一九九八)『後悔の深淵―「山月記」試論―』『日本文学』四七巻十二号 日本文学協会

(やまとさとし)／大分県立別府鶴見丘高等学校